

生涯学習開発財団ライフラーニング会員の、生涯学習への取り組みや社会貢献活動などを紹介し、さらなる生涯学習の活発化と、生涯に渡って社会参加できる社会の実現を訴えていく企画です。第2回目は、看護師の経験を元に、訪問看護事業やトラベルヘルパー事業を展開する、株式会社アイナース代表取締役 八木京子さんの取り組みを紹介します。

病氣、要介護でも前向きに生きる手伝い 愛を感じる事ができる在宅看護を提供

株式会社アイナース代表取締役 八木京子さん



「家に帰りたい」と言いながら、病院で亡くなる患者さんを多く見てきたという八木さん。患者さんにとって病院はアウェー。病院の規則に沿った食事の時間や消灯時間があり、知らない他の患者さんがたくさんいる中で治療は落ち着かず、気が休まらないことも多い。

とはいえ、自宅に帰っても、それぞれの家庭の事情がある。患者さんと家族がストレスをためることなく、住み慣れた自宅で看護を受けられる態勢はできないものかと、取り組み始めたのがアイナースを起すきっかけだった。

患者さんや家族の不安を解決する助言と看護

介護保険の認定を受けていても、病院や施設に入院していたら、一時的な外出や試験的に外出の時介護保険でのサービスを利用できない。

在宅療養に移行するのに外出や宿泊を経験して、在宅の生活をイメージしながら退院する機会を持つ前に、患者さんや家族が不安のまま退院するケースが多々ある。24時間医療者に見守られている病院から自宅に帰ると、本当に大丈夫だろうか、夜間に急変したらどうしようという不安から、家族の疲労は蓄積していくばかりだ。こうした患者さん、家族双方の不安を解決していくのが、同社の基本姿勢となっている。

特に患者さんがガンなどで終末期の場合、最後は自宅に帰りたいと望むケースが多い。でも家族からすれば病院にそのままいた方が安心だし、自宅に帰ってきて家族が全てを背負うのは怖いと感じ、なかなか一歩前に進めない。

家族が決心して患者さんが自宅に帰ってきてからも、日々、衰弱していき、家族は夜間の不眠続きで苦痛が増すだけだ。あれだけ家族に近くに

いてほしいと思っていたのに、現実と一緒にいると患者さんは疲労溜う家族に申し訳ない、ただ夜が明けると待つていた状態が長く、同社では、こうした状況でも双方の苦しみを緩和できるような助言と看護を提供している。患者さんの看病はもちろん、死への不安や家族に対する心のケアも行う。

現場では代表取締役ではなく 看護師の肩書きで活動

八木さんは看護学校卒業後、看護師として脳外科、CCU、小児科、内科、外科などを数多くの病院で経験してきた。そうした中、介護保険や医療保険では時間的な制約で医療処置中心となり、安心感を求めている患者さんや家族とかわる時間が取りにくいと実感していた。

そこで2006年5月に株式会社アイナースを立ち上げた。患者さんのホームである自宅に伺い、保険の制約にとらわれない十分な在宅看護を提供するためである。訪問スタッフは、看護師の資格を持つ以前の仲間たちが賛同し、集まってくれた。現在はパート中心の5名体制でやっている。

八木さんは、初対面での不安を取り除くために名刺を2枚持ち、使い分けている。

「代表取締役」という肩書きを見て、本当に看護できるのか不安を抱く人が多いので、自宅に伺って患者さんと家族に最初に会った時には、看護師という肩書きの名刺を渡します。」



あきらめず外に出られるよう トラベルヘルパーに期待

急な依頼であっても、ていねいに温かい対応を心がけて来たおかげで、少しずつ評判が広がって来ているとのこと。

今後は看護師付き添い旅行のサービス提供に注力したいとしている。日帰りのお出かけから、海外旅行をサポートしたり、高齢者や、体が不自由な親と一緒に旅行をしたい家族などをフォローしていく。

介護福祉士やホームヘルパー2級などの資格を持つ旅行ガイド「トラベルヘルパー」の活躍に期待された八木さんは、NPO日本トラベル

ヘルパー協会の理事を務める。

トラベルヘルパーは旅先での入浴や排渇、着替えや食事の介助を行う。車椅子利用者の海外旅行では空港までのタクシーの手配、機内での介助、観光先の受け入れ状況の確認などが主な仕事となっている。

付き添い外出の時でも「外の空気を吸うと生き返る」と笑顔が出る。旅行では楽しさが加わり、リハビリ効果もより期待できる。

運搬や病氣や要介護になったとしても、絶望することなく、家族や社会の中で笑顔で前向きに生きられる。幸せとはそういうものだと感じさせられる取り組みである。

▼株式会社アイナース 03-3638-6964

■利用者の例

●自宅には元気になる効力がある

脳梗塞により奥様が入院。軽度の失語症にもなった。ご主人はもともと雑務で、面会に来て、他の患者さんがたくさんいる病室では会話が弾まない。さらにリハビリ中の奥様には、「歩けないと退院しても家事ができないと困るでしょ」という療法士の励ましさえプレッシャーになり、成果はなかなか表れなかった。

歩いてトイレにも行けない、お茶碗も置く感じ持てない状態の奥様を見ていたご主人は、このままでは何もできなくなってしまおうと思い、まだ元気な今のうちに一度自宅に帰りたいと希望した。

アイナースのスタッフがそれに応え、試験泊の許可を得て車椅子で連れて行った。玄関は二重の段差があり手すりもない。「抱えて段差を昇らない」というスタッフの心配をよそに、奥様は両手を差し出し、「引っ張って」と力強く言い、30cmほどの段差を昇ってしまったのだ。室内でも足取りはしっかりとおり、手を添えるとトイレも行ける。布団からも起きることができる。菜摘も自分で持ち大好物の刺身をたくさん食べ、3ヶ月ぶりにおなか一杯になったと言う。自宅には見えぬ力がある。

●ダイヤモンド婚で夫婦、ご対面

奥様が病気で長期入院し、ご主人は毎日面会に行ったが、6年目にご主人が末期がんで別の病院に入院してしまう。体力が落ちもう退院できないことを自覚したが、だからこそ奥様に会いたい気持ちが募った。

それを見た子供たちが、結婚60年のダイヤモンド婚式を企画した。ご主人を民間の救急車に乗せ、奥様の病院でわずか30分の面会。しかし二人は相互に手を握り合い、摩りあう。苦しい中、ご主人は奥様に声をかける。しゃべれない奥様もいつとも違う反応を示し、そのままずっと手を握り摩り合っていた。最後の、しかし幸せな面会だった。

●立つ鳥跡を濁さず

独り暮らしのSさんがガンで終末期を迎え入院した。「真面目な部分や片付けておきたいことがある。『立つ鳥跡を濁さず』で、きれいにしたい」と強く要望。

病院から外出の許可を得て自宅に来ると、親族、弁護士、会計士と整った。書類を作成し、物品の場所をリストアップし、不要な物は処分した。

「よかった。これで安心した。独りだからこそ自分で納得させたかった」と、満足した表情だった。貫しかったが本人にとっては充実の一歩だった。